

教育課程部会特別活動ワーキンググループ（第5回）議事録

1. 日 時 平成28年3月10日（木）10時00分～12時00分
2. 場 所 文部科学省3F1特別会議室
3. 議 題
 - （1）特別活動における学びのプロセスについて
 - （2）キャリア教育の視点からの特別活動の役割について
 - （3）その他

【貝ノ瀬主査】

定刻となりました。ただいまから中央教育審議会初等中等教育分科会の教育課程部会特別活動ワーキンググループの第5回目を開催いたします。

今日は恒吉委員，平川委員，三浦委員，宮下委員，和田委員が残念ながら御欠席となっておりますので，よろしくお願いいたします。

まず冒頭，配付資料の確認を事務局からお願いいたします。

【美濃教育課程課課長補佐】

それでは，配付資料の確認をさせていただきます。本日は，議事次第にも記載しておりますとおり，資料の1から9までと，その他机上に参考となる資料を配付させていただいております。不足等がございましたら，事務局までお申し付けいただきたいと思います。なお，机上にタブレット端末を置いておりますけれども，その中には，前回の会議資料や本ワーキンググループの審議に当たって参考となる審議会の答申等をデータで入れておりますので，こちらも必要に応じて御参照いただければと存じます。

【貝ノ瀬主査】

今日は，2点論点がございます。1点目は，「特別活動における各活動の意義及び育成すべき資質・能力について」，それから，2点目は，「キャリア教育の視点をもった特別活動の充実について」ということで，議論を深めてまいりたいと思います。

まず，議事に入る前に，2月24日の総則・評価特別部会において議論されました，「アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力の関係」，それから，「学習評価の改善のポイント」の2点につきまして，私どものワーキンググループも関係する内容ですので，事務局より説明をお願いしたいと思います。

【大杉教育課程企画室長】

資料の8と9になりますけれども、9の方は前回も少し全体の状況をお伝えさせていただきましたので、資料8を中心に御説明をさせていただきたいと思います。アクティブ・ラーニングの視点として、資質・能力の関係、現在、各ワーキングでも学びのプロセスの在り方、資質・能力の在り方を御議論いただいているところですが、その状況も踏まえながら、少し教科横断的に整理すべき事項について、総則・評価部会で御議論いただいたところです。また、学習評価の在り方についても、併せて議論をしていただいておりますので、共有させていただきます。

それでは、1枚おめくりいただきまして、アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力の育成との関係、特に「深い学び」を実現する観点からということです。このペーパーの趣旨も踏まえながら、資質・能力の三つの柱の整理や、見方・考え方ということが今回出てきておりますけれども、学習プロセスの在り方、資質・能力及び学習プロセスと指導内容の構造化について、引き続き御検討いただきたく存じます。1ポツの部分で、まず、アクティブ・ラーニングですが、御承知のとおり、論点整理におきまして、「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」、この三つの視点について整理されたところです。こうしたアクティブ・ラーニングの意義は、教科等の内容的な理解を深めながら、資質・能力を身に付けるということ。そして、そうしたことが子供たちの学ぶことの意義の実感や、社会とのつながりの実感ということにつながり、長年課題とされております学習意欲へのアプローチという意味でも効果が高いということです。論点整理でも既に指摘されておりますが、アクティブ・ラーニングについては、「型」に着目した理解がされているのではないかと懸念。これにつきましては、特定の指導の型ではなくて、授業改善の視点であることに留意する必要があるということです。一方で、学校現場からは理念だけではなく、具体的な実践例をとという声が出たところです。こうした実践例については、現在、各教育委員会等でも御検討いただいておりますが、様々な型や方法の種類を紹介することではなくて、アクティブ・ラーニングの視点に基づき、どのように授業が改善され、子供たちにどのような変容が見られたかという、授業改善に関する実践例の蓄積と普及をお願いしたいと考えております。2ページ目は、様々な型や方法は、そうした中で手段として活用されながら、その効果が検証され、不断に見直されていくべきではないかということでございます。

それから、「深い学び」の視点ですが、「対話的な学び」と「主体的な学び」につつまし

では、教科共通で理解しやすいということありますが、「深い学び」については、現在、各教科等ワーキングで御議論いただいている最中でありまして、少し具体的なイメージがつかみにくいという指摘もあるところです。各教科等ワーキングの現在の御議論の中で、「深い学び」の視点の具体化を図っていただく必要があるのではないかとということ。そして、複数の教科等別ワーキングにおきまして、現在、資質・能力の育成や、学習の深まりの鍵となるものとして、各教科等の特性に応じ育まれる「見方・考え方」、前回も理科における科学的な「見方・考え方」、社会科における社会的事象に対する「見方・考え方」という御紹介をさせていただきましたが、こうした「見方・考え方」が重要ではないかという検討がなされているところです。「深い学び」というものに照らして考えるならば、こうした「見方・考え方」を習得・活用・探究を見通した学習過程の中で働かせながら思考・判断・表現し、それを更に成長させ、資質・能力を獲得していくことが「深い学び」ではないかということでもあります。

アクティブ・ラーニングの実践例の中では、深さを欠くことによる失敗事例も論点整理で指摘されており、極めて重要であるということ。先生方にはこうした「深い学び」を通じて、子供たちの教科等の内容的な理解に責任をもち、授業を組み立てていくという力量を高めて、先生方がしっかりと教えることも含めて、子供たちに関わっていくことが求められるということでもあります。

この「見方・考え方」ですが、これ自体は新しい概念ではありません。この資料の10ページ目、11ページ目あたりにもありますが、社会科における「社会的な見方や考え方」、理科における「科学的な見方や考え方」など、既に現行学習指導要領においても培うこととされている教科があります。一方で、その内容については必ずしも具体的に説明されておりません。

3ページ目は、改めまして「見方・考え方」とは何かということではありますが、様々な事象を捉える各教科等ならではの視点や、思考の枠組みではないかということ。そして、三つの資質・能力の柱に照らして考えますと、知識・技能を構造化して身に付けていくために不可欠であるということ。また、思考力・判断力・表現力を豊かなものにしていくために不可欠であるということ。また、どのような「見方・考え方」を通じて社会や世界に関わるかという点が、学びに向かう力や人間性の育成に大きく関わっていくということで、この三つの柱をつなぐような形で採用しているということです。そうした「見方・考え方」を働かせながら学ぶという中で、資質・能力を獲得していくという学びが、「深い学び」

ではないかということです。こうした視点で、学びの中で様々な出来事を捉えて考えていくことを通じて、「見方・考え方」自身も成長させながら、資質・能力を獲得していくということ。そして、指導の際には子供たち一人一人の「見方・考え方」の困難さを捉えて支援していくという視点も重要であるということです。

そして、3番目で、その教科等の特性に応じ育まれた「見方・考え方」の関係性ですが、「例えば」というところにありますように、相互に影響し合いながら成長していくのではないかということ。そして、特に特活も含めた教科横断的な学び、実践的な集団活動などを通じて、各教科において育まれた「見方・考え方」が、総合化・統合化されていくのではないかということ。それにより、より社会や世界の幅広い事象を捉えたり、多面的・多角的に考えたり、様々な複雑な文脈の中で捉えて考えたりすることができるようになる。併せて、それにより各教科の「見方・考え方」も成長していくという関係性にあるのではないかということです。今後、3番目にありますように、特別活動におきましては、特別活動ならではの「見方・考え方」というものと、他教科の「見方・考え方」を総合化・統合化していく働きの二つが重要になってくるのではないかと考えられます。そうしたことから、特に「深い学び」という視点に着目して整理をしていただいたものです。

続きまして、学習評価で、19ページ目です。学習評価につきましても、教科横断的な整理をしていただきました。「目標に準拠した評価」を実質化していくために、以下のような留意点に基づいて御検討いただきたいということです。現在、既に整理をしていただいております資質・能力の三つの柱に基づく明確化。先ほど出てまいりました「見方・考え方」とは何かということ。そして、指導内容が、資質・能力の三つの柱に基づき構造化されていくということ。これらは、目標の明確化ということのみならず、目標に準拠した評価ということで、評価の改善の視点からも極めて重要であるということです。

一方で、資質・能力の三つの柱それぞれについて整理をしていただいておりますが、これらは相互に関係し合いながら育成されるという関係性もありますので、こういった関係については、総則などでしっかりと示していくことが必要ではないかと考えております。

観点別評価ですが、前回改訂時に学力の三要素との関係性が既に整理されております。それに基づいて観点の趣旨が明確化され、観点別評価の実施率は高いという調査結果があるということ。また、難しいとされておりました思考・判断・表現の評価の在り方に関する実践も蓄積されております。一方で、その観点別評価の中身について子供たちの資質・能力の育成に向けた指導と評価の一体化という観点からは、質的な改善の余地があるので

はないかという指摘もございます。こうしたことを踏まえまして、「目標に準拠した評価」の実質化、あるいは、教科や校種を超えた共通理解に基づく組織的な取組を促す観点からは、別添イメージのような共通の整理に基づき、観点と趣旨を検討してまいります。具体的な書きぶりは、教科の特性に応じた表現ぶりということです。

23ページ目は、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」、この項目名も含めまして、具体的な書きぶりは、各教科等の特性を踏まえて検討をお願いしたいところですが、この共通のイメージを基に御検討いただきたいと思っております。

19ページ目に戻りまして、観点別評価につきましては、毎回の授業で全てを見取るのではなく、カリキュラム・マネジメントの考え方の下、単元や題材のまとまりの中で評価の場面をデザインしていくということ。また、20ページ目は、現在、御検討いただいている学習プロセスの在り方の中で、評価の場面との関係性も明確にされることが望ましいということ。

それぞれの観点ですが、「知識・技能」につきましては、知識について事実的な知識のみならず、構造化された概念的な知識の獲得に向かうこと。また、一定の手順に沿った技能だけではなくて、様々な状況で使える技能の習熟・熟達に向かうことが重要ではないかということ。これらは発達の段階に応じて、それぞれ必要な知識・技能の重点が変わってくる可能性もございますので、各教科等の特性、発達の段階に応じて、どのような知識・技能を獲得することが求められるのかについて、明確化をお願いしたいということでございます。

「思考・判断・表現」につきましては、各教科の特性に応じ育まれる見方・考え方を用的学習プロセスを通じて評価することになるかと思えます。これにつきましても、目標、指導内容の構成の中での明確化、そして、思考力・判断力・表現力は一足飛びに成長するというよりは、一定の時間をかけて成長していくと考えられますので、学年等を超えた整理についても御検討いただきたいと思っております。

「主体的に学習に取り組む態度」でございます。これを三つの柱、資質・能力との関係性について整理をしていただいております。「学びに向かう力・人間性」の柱との関係性ですが、この中には「主体的に学習に取り組む態度」として、観点別評価を通じて見取ることができる部分と、感性や思いやりといった評点にはなじまず、個人内評価を通じて見取部分があるのではないかと。そして、観点別評価の観点として設定される「主体的に学習に取り組む態度」については、既に論点整理で指摘されておりますように、挙手の回数

や、ノートの取り方などの形式的な活動で評価するのではなく、子供たちが学習に対する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり、思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価していただきたいということです。元来、現行の「関心・意欲・態度」も同じ趣旨ですが、なかなかこうした誤解が払拭し切れないという問題点が長年指摘され、現在に至っております。これを踏まえまして、「関心・意欲・態度」を改め、「主体的に学習に取り組む態度」としているところです。こうした趣旨に沿った評価が行われるよう、見通し、振り返りなど、適切に評価の場面を設定していくことが重要であるということです。

また、観点別評価につきましては、別添イメージの内容のうち、示されていないところがある部分につきましては、各教科の特性に応じ考えていただきたいということ。また、19ページ目にもありますが、小・中・高を通じて一貫した観点を御検討いただきたいと考えております。

21ページ目は指導要録ですが、指導要録の在り方につきましては、議論を踏まえつつ、専門的な検討の場をもってまいります。

また、指導要録に加えて、既に特活ワーキングで御議論いただいておりますような、子供たち一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通し、振り返ることができるようにするための仕組みを検討していくということです。こうした仕組みを活用しながら、子供たちが自己評価を行うことを学習活動の一つとして位置付けるということ。これは今後の御議論次第ですが、特活が中核的な役割を果たしていくことも考えられます。その際、教員が対話的に関わることも重要であるということ。そして、こうした学びのポートフォリオや、個々の学びの特性が、校種を越えて共有されるような仕組みの在り方を検討していくことであり、学習評価に関する残された論点につきましては、引き続き検討ということでございます。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。アクティブ・ラーニングと評価について御説明いただきました。これは特に参考ということですので、質疑は省略させていただきます。今、お話しのように、アクティブ・ラーニングということが、新しく使われたということもあるのですが、もう教えるはいけないのではないかという誤解が結構ありまして、教えるべきことは教えなければいけないのだと言わなければならない場面が、ある会場でありました。その誤解を払拭していかないといけないなと思いました。それから、この間エッセイを読

んでいたら、「型から入る」という、そのようなテーマでアクティブ・ラーニングを説明しているような筆者もいたりなどして、この辺は更なる議論が必要だろうなと思いました。

では、続いて、今日の論点を事務局から説明いただきたいと思います。

【美濃教育課程課課長補佐】

論点について御説明する前に、少しだけ前回の御議論についておさらいをしたいと思います。前回の第4回の会議におきましては、特別活動において育成すべき資質・能力、また、小・中・高を通じた特別活動の意義や役割などについての協議をしていただきました。具体的には、それまでの協議を踏まえて、特別活動において育成すべき資質・能力の視点に基づいて、委員限りの資料としてお配りしましたが、資質・能力の三つの柱に沿った小・中・高を通じた特別活動において育成すべき資質・能力を整理したものについて御議論をしていただきました。

また、特別活動において育成すべき資質・能力の視点について、人間関係形成、社会参画、自己実現の三つに整理して、自己と他者との関係から、それぞれの視点についてまとめたものについて御議論をしていただいたところです。この協議の中では、例えば、自己実現については、「自分らしい生き方」「自分らしく生きること」という表現の方がよいのではないかという御意見や、よりよい自分に向けて成長することを示す自己指導と自己啓発によって、象徴的に書かれていることが何らかの形で示されればよいのではないかという御意見。また、社会参画については、集団への関与ではなくて、集団への寄与であるという御意見も出されたところです。

さて、本日御検討いただきたい事項は、資料1にもお示ししてありますように、大きく2点です。まず、第1点目は、「特別活動における各活動の意義及び育成すべき資質・能力について」です。論点整理においては、「次期改訂に向けては教育課程における意義を明確化するため、学級活動・ホームルーム活動、児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事のそれぞれを通じて、育成すべき資質・能力を明確化する」とされております。

前回の会議におきましては、各教科における学びと特別活動で身に付けた資質・能力とを互いに生かす往還関係についてお示しいたしましたが、協議の中では各教科との往還の前に、特別活動の中での往還ができていない現状があるのではないかという御指摘もいただいたところです。このことから、本日お配りしております資料2においては、生活環境や人間関係の広がりを受けて、特別活動における各活動、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事がそれぞれどのような関係になっているのかということイメージ図でお

示しております。

資料1に戻って、二つ目の丸ですが、「特別活動における各活動は、それぞれに集団の構成や活動の目的が異なっており、そこで育成すべき資質・能力も各活動の特質に応じて異なっていると捉えることができる」としております。前回会議において、特別活動における学びのプロセスのイメージということで、特別活動ではどのようなプロセスで活動が進んでいくのかということについて、これまでの実践を基に特別活動を全体として捉えた形でまとめさせていただいたわけですが、例えば、学校行事には児童生徒の主体性の発揮はあるけれども、自治はないということ。各活動や学校行事では、活動過程や活動内容が異なることを御指摘いただいたところです。このことから、資料3におきましては、「特別活動における各活動の意義や役割」ということで、各活動、学校行事ごとにそのプロセスをまとめてみました。

以上を踏まえまして、前回までの本ワーキンググループにおいて整理した、特別活動において育むべき資質・能力の3本柱での整理を基に、特別活動における各活動及び学校行事について、それぞれの活動のプロセス及びそこで育成すべき資質・能力をどのように考えることができるのかということについて御議論をしていただければと存じます。

続きまして、本日御検討いただきたい事項の二つ目、「キャリア教育の視点をもった特別活動の充実について」です。平成23年1月に取りまとめられました中央教育審議会の答申、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」におきましては、今後発達の段階に応じて、キャリア教育を推進していく上では、基礎的・汎用的能力を中心に育成することが述べられております。前回のワーキンググループにおきましては、キャリア教育の中核的实践場面としての特別活動の意義・役割や、特別活動の更なる充実を図るための学びのプロセスを記録し、振り返り、評価するためのツールとしてのポートフォリオの導入などについて、御意見をいただいたところです。

以上を踏まえまして、キャリア教育において育成すべき資質・能力、基礎的・汎用的能力と、特別活動において育成すべき資質・能力との関係について、どのように考えるか。また、特別活動の果たす役割や意義をどのように捉えることができるかということについて、御議論をしていただきたいと存じます。その際、先ほど申し上げた中教審のキャリア教育、職業教育の答申や、学習指導要領の総則、特別活動の内容等から、キャリア教育の系統性についてまとめた資料4。また、資料5も同じく中教審のキャリア教育、職業教育答申を基に作ったものでございますけれども、小・中・高を通じてキャリア教育において育

成すべき資質・能力を三つの柱に沿って整理したものです。この資料4, 5も御参照いただきながら御議論をいただければと存じます。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。ただいま御説明いただきました一つ目の論点ですが、「特別活動における各活動の意義及び育成すべき資質・能力について」ということで、資料1と資料2, 資料3を基に議論を深めていきたいと思います。

【脇田委員】

資質・能力について、どのレベルでお話しすればいいのかということがあるのですが、例えば、この学級活動と、小学校であれば児童会活動の関係で申せば、学級活動には二つの内容がございます。一つは、自分たちの学級の生活をよりよくしていくためにみんなで話し合っ解決していくという内容1と、自分の生活をよりよくしていくために、自己指導能力を高めていくという内容2があるわけです。特に、内容1について、自分たちで学級の諸問題に気付き、それを解決していくという実践的な態度を育てていくことと、それを児童会活動等に反映していくことは、実践的にも経験的にも整理されるのではないかなと思います。

ただ、学級活動の内容1と内容2を見ていきますと、子供たち一人一人が集団生活をどうつくっていくのかということと、自分がどういうふうによりよく生きていくのかという態度を育てていっているのではないかなと考えておりますが、そのレベルでよいのかどうか。切り口としてお話をしました。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。まさに発達の段階で、深い学びにも通じるということですので、問題の発見にしても、これは発達の段階で相当に違ってくることは間違いない。その場合での育成すべき資質・能力。

【藤田委員】

発言というよりも教えていただきたいことで、先ほど美濃課長補佐から資料2, 資料3についての御説明があったのですが、資料2の読み方が、私の能力不足でよく分からないのです。矢印が薄いピンク色で縦横にいつていると思うのですが、この縦横の軸に相当する座標の説明がここの資料2から読めなくて、しかも児童会、学校行事が右左にあって、学級活動とクラブ活動が上下の関係にあって、その外側に書いてある四角の中を、例示として読んでいいのか、それとも、それ以外の何か、発展的なものとして読むべきなのか。こ

の読み方と軸について、もう少し言葉を添えていただくと理解が深まるなと思ひまして、発言以前の質問でございます。

【貝ノ瀬主査】

御質問ですね。このピンクの矢印が、ずっとどういうふうにつながって、どこまで伸びるということを考えているのかということですね。

【長田教科調査官】

これは真ん中から外に行けば行くにしたがって、時間を経過するという形でございますが、どこまでいくのかという細かい概念はありません。特別活動で、小・中・高の間で育まれてきた力が社会生活の中でどんなものにつながっていくかというものを例示したものでございます。

【藤田委員】

ありがとうございます。ということは、中心から外側に行くにしたがって、例えば、小学校や中学校、高等学校を置くと、社会生活の中でそういったものがどう発展していくのかを中心から外に時間を経過していくということですね。分かりました。

それが分かった上でもう一つ教えていただきたいのですが、これは学級活動とクラブ活動が縦軸になっていて、児童会と学校行事が横軸になっているのですが、いわゆるXY座標の軸の性質というのは、どういう切り分け方なのか。それともこれはXYで読むものではなくて、ただ単に中心から外側に向かって時間を経過するという見方をすればいいのか。この縦横の関係についても教えていただきたいと思ひます。

【貝ノ瀬主査】

X軸、Y軸の意味を問われているのですよね。どうですか。

【長田教科調査官】

X軸、Y軸の関係はありません。あくまでもそれぞれの活動において、時間的経緯で社会生活ではこんな場面に活用されますよねと明示したものです。

【貝ノ瀬主査】

なるほど。社会生活にそれぞれが皆つながっていく、広がっていくのだということを示しているわけですね。

【黒木委員】

私は資料2を見せていただいたときに、長く特別活動を実践してきて少し感じる場合がございます。学級活動、学校行事、児童会、クラブということで、恐らく小学校をイメ

一ジして今書かれているとは思いますが、時間をしっかり保障されている学級活動が、中心になってくると私は思うのです。児童会活動、学校行事は、各学校の創意工夫によって時間は確保されておりますが、非常に今厳しい状況にあるというのが現実です。クラブ活動にしても、私たちの地域では年間10時間程度しか実施していないということもございます。そういった中で、これがこのような形で並べられていいものなのかというのは、非常に疑問があるのです。やはり学級活動・ホームルーム活動が中心となりながら、その力を生かして児童会・生徒会、そしてクラブ活動、中学校でいうと部活動でしょうか。そういうものにまで発展していくとか。それから、この図を見ますと、児童会活動の隣りに自治会や議会が来ております。以前、子供会を見ているときに、学級活動で頑張っている力が、子供会で発揮されてくる場面も多々見てきております。ですから、単純に自治会につながるっていくというものでもなく、いろいろな関わりの中で子供の力というのは身に付いていくのではないかなと。ですから、学級活動やホームルーム活動が、この活動の中心になってくるとというのが、何らかの図で表現されるといいかと感じているところです。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。学級活動・ホームルーム活動を中心的に位置付けた上で広がりをもっていくというイメージの方が、現実合っているのではないかとのことですね。これは多分例示だと思うのですけれども、議会、自治会という前に子供会という、子供に関わりの深い地域的な活動が例示された方が分かりやすいだろうというお話でもあったかと思えます。この中の内容が社会につながり、広がっていくということを目指したいとか、そうあるべきだということには、皆さん了解だと思えます。どういったことを主にすべきか。これだと並列的に学級活動や行事等がある程度同じようなウェイトで考えられているけれども、ということですね。この辺をどういうふうと考えて整理するかということですね。

【吉村委員】

ちょうどこの図を見ていて、この矢印の軸自体には特に意味をもたせていないということでしたので、それを前提にということですね。この図がどこまで外に出ていくものか分かりませんが、やはり図というのは独り歩きして意味を読み取られます。例えば、今、黒木委員が、この学級活動などが四つ並列に並んでいるけれどもとおっしゃいましたが、やはりそうも読めてしまうわけです。そうなった場合に、この軸の説明を求められたときにできないというのも心配かなという気がしてしまっていて、実はこの四つの方向に出ている軸が

それぞれ学級活動，児童会活動などから伸びていますので，この四つの活動のそれぞれの意味が，この軸の説明になってくるのではないかなという気もしています。

例えば，私が個人的にこれを勝手な解釈で読み取ると，右上の方はどちらかというと学級活動や児童会活動で，集団とか，あるいは自分が所属している集団社会のようなものの自治的な活動，また，その集団社会の枠組みのようなものを自分たちで考えていくような方向性がどちらかというとあるのかなと。学校行事，クラブ活動は運営の仕方にもよるのですが，こちらはどちらかというと，集団や社会の枠そのものを俯瞰的に考えていくというよりは，その集団や社会の一員として帰属しているという意識を高めたり，その集団や社会にどう貢献したりするかと，そちらの方向が強いように私は勝手に読み取ったところがあるのです。そういう解釈でいいのか悪いのかも含めてですけれども，そういう議論はしておく必要があるのではないかなという気がいたしました。

【橋谷委員】

私も資料2のイメージ図についてですけれども，小学校では，実際の指導の場面において，教師の適切な指導の下，子どもたちが話し合いを通して企画，運営していくという学級活動，特に学級会で培った自治的な力が，クラブ活動，児童会活動に生かされていることを実感しています。学級活動，クラブ活動，児童会活動は，それぞれに違う活動ですが，先ほど黒木委員がおっしゃったように，学級活動で身に付けたものが，クラブ活動や児童会活動で生かされていきますので，学級活動がもとにあると思っています。学校行事は自治的という面では，少し違っているところもありますが，学級活動，クラブ活動，学校行事，児童会活動を，上下左右において，四方に広がっているイメージ図に少し違和感を覚えます。

【白松委員】

先ほどの「主体的に学びに向かう態度」という観点から見たときに，特別活動の中には，先ほど脇田委員もおっしゃったと思いますが，やはり（1）と（2）の中に，集団に向かっていく部分と，結局，個に還元されていく部分の二つが特別活動に内包されていると思うのです。だから，そういう意味では，どうしても二層構造的になっていて，例えば，学校行事などいろいろやった中，体育祭で自己の特性を理解するということがあります。それで，集団と個というのが常にフィードバック構造にあるということを考えたときに，この図も，どうしても平面図になっているので表記が難しいと思うのですが，二層構造で捉えてみると，もう少し違う図になるのかなということを感じました。集団を高めるというこ

とと、個を高めるというところに2軸はあり得るのかなと感じていました。

【脇田委員】

この資料2を見て思ったのですが、先ほどの説明の中でこの矢印が社会生活という方向に向かっていくのであれば、論点整理にも示されたように、身近な社会と学校や学級を捉えるならば、この一人の子供が学級活動や児童会やクラブ活動、学校行事というものが、社会で行われていること、例えば、こう見ると、児童会活動というのは議会等につながっていくでしょうし、そう考えると簡単で、クラブ活動だったら地域の同好会といったものに参加するとか。式典行事も身近な生活集団もそうなのですが、それは社会で行われるものであって、資質・能力というと、今度はまた少し違ってくる。例えば、クラブ活動だったら、自分でそういうサークルに参加して生活を豊かにするとか、そういうものであれば資質・能力になってくるだろうし、自治会や議会などであれば、そこが自分の生活、社会、住んでいる地域とか自治体の社会をよりよくしていくというところまで書き込んでくると、何か社会というものが構造的に見えてくるような気がします。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。もともと構造的に往還の問題を平面に表すというのが、大体至難の業ですけれども、よりよい平面での表現を求めて、今、議論されているわけです。どうでしょうかね。

【小林委員】

資料2です。第3回会議の配付資料6を整理し直したとございましたので、その時の資料を見ますと、学校行事のところ、資料2では「式典、行事など」となっていますが、第3回のときには、例として「地域の行事、旅行、ボランティア活動など」と記載してあります。「式典、行事」だと、そこに参加するだけのイメージがもたれるのではないかと考えます。しかしながら、地域の行事であるとか、ボランティア活動だと、そこに主体的に参画してつくり上げていくようなイメージをもたれるのではないのでしょうか。「式典、行事」より、前回の地域の行事とかボランティア活動の方が、学校行事の延長としては適切ではないかと思いました。

【生重委員】

教育者じゃない私もこれを困惑して見ていて、先生たちがおっしゃるとおり、子供たちの特別活動の中心は学級活動なのだろうと思っていて、その学級活動の中から得たものをもって、児童会活動に子供たちが推薦されて出ていく。これを見ていて、自治会は子供会

のことかなと思いながら、でも、現在、子供会は全国的に見るとかなりまだらな状態になって行われていないところも多い。そのときに、子供議会などに出ていくのは、やはり学校の指導の下に出ていくところと、地域での活動に身を投じていくところが並列で書かれていることの違和感。こちらの地域の行事、ボランティア、それから夏休み長期期間や休業中の宿泊体験活動等も含めて、そちらの方に置いていただいて、そこには今、国が進めているようなコミュニティ・スクールの考え方が生きてくる。やはり、学校が子供たちをこう育成していくのだというビジョン、ミッションを地域とともに共有化していき、そこに特別活動として、ここを規制したり、伸ばしたりしたい能力であるということを持ち、地域の方と共有していくことによって、地域の方とも学校が子供を育てたいイメージを共有できる。そういうことが読み取れる。次回、多分、誰もが読み取れるものとしてあるべきという話が出ていたかと思うのですが、その大前提となる図に、すみ分けをきちんと分かるように、どんなに教育の素人が読んでも、「なるほど地域で関わるときには、この部分を学校と共有化して関わればいいのだな」とか、「先生たちはここを目指して頑張っているのだな」ということが読み取れる。そして、ここで身に付けた力こそが、コミュニケーション能力であり、表現力であり、我慢する心でありという、様々な要素的なものがしっかり分かるようになっていて、これが各教科に生きていく。だからこそ、特別活動こそが各教科につながる全ての中心になっていくものなのだという事を明確に記していただけるとうれしいなと思います。

【杉田委員】

大杉室長から説明のあったこの資料8とも関連させて考えを述べたいと思います。三つありまして、一つは、この特別活動各内容の関わり的一件事が一つ。そして、資質・能力について。それから、評価についてと分けて話したいと思います。一つは、示していただいたそれぞれの内容ごとのプロセス。これはすごくいいと思います。そもそも特別活動は特質の違ったものを内在しているので、それを一つのプロセスにまとめなかったという点では、これまでの流れを踏まえたものであり、評価できると思います。ただ、特別活動の学習指導要領の歴史的変遷を見なければいけないのは、そもそも自治活動として始まった特活は、その後、学級指導が入り、進路指導が入り、その後学校行事が入るという歴史を経てきたものですから、いわばかつては児童活動の中にクラブ活動も学級会も児童会も生徒会も、一つにくっついてあったわけです。そういった流れの中で今があるわけで、そのことをどう表すかということを考えるべきなのか、そもそもこれはそういった軸の話抜きに

して、地域社会との関わりだけを示したとするのか。いずれにしても、ここは整理が必要ではないか、誤解を生まないようにする必要があるのではないかと思います。

それから、資質・能力について言えば、何を知っているか、できるか、それをどのように使うかということですが、先ほど大杉室長からも話があったように、総合と同様に、単純に特活で学んだ技能、知識をどう使うかだけでなく、教科で学んだものも使っているし、それを往還しているわけです。ですから、教科と総合や特活を同じ絵柄にしているかどうかというのは少し気になります。同じように見えてしまうという気はしました。その特質の違いを示す手があるのではないかと思います。

それから、資料8の23ページに、三つの観点が示されていますけれども、特に、この態度という形にしたのは、そもそも特別活動は自主的、実践的な態度を目標にしていますので、極めて分かりやすいです。これは評価の観点としてとても分かりやすくなりました。ただ、細かい点で言えば、これまでは、知識・技能のところでは特に特活が重視していたのは、「意義の理解」でした。そして、この意義の理解というのは、知識の習得というよりも、体得するということのようなことです。例えば、社会に参画するのに学級の諸問題に関わることはとても大事だという考え方や、それは個人で解決するのではなく、集団を介して解決することが大事だという考え方。そういう意義の理解がないと、方法を知っていても活用するようにはなりません。そういう意味では、この知識・技能は教科とは異なる特徴があることを踏まえる必要があると思います。

それから、思考・判断・表現のところは、現在は、思考・判断・実践という言葉にしています。つまり、「なすことによって学ぶ」といったことを特徴とする特別活動にとって、「実践」という言葉にすることで、その中に「表現」プラス「実行」があるという意味を込めました。今回、教科と同様の「表現」という言葉に揃えることのメリットを優先する場合も、表現の中に「言語表現」プラス「体現」という実践をも含むという解釈にする必要があります。

また、「見方や考え方」については、特別活動は、各教科等で学んだ「見方や考え方」も生かして、集団の一員としての「見方や考え方」になるだろうと思います。それは、言い方を変えれば違いや多様性を配慮する考え方とも言えるのではないかと思います。そういった特別活動固有の役割をどう示していくかということが今後大事なのではないかと思います。

評価のことだけ一つ。これまで、特別活動は加点評価を中心に考えるべきだと。何がで

きないかというよりも、何ができるようになったかを見るべきではないかということが中心になっていたことはここで申し添えておきたいと思います。もう一つ、構造上、学級活動を中核に置くといったことは、これまでも何回か書いてきているので、さっき言った構造の問題をどうするかということがとても重要だと思っています。

【須藤主査代理】

資料3の部分が委員の先生方からは御指摘がなかった部分ではあるわけですが、本日お預かりしました検討事項の丸の二つ目の部分から少しお話をさせていただきたいと思います。「特別活動における各活動は」となっています。これは「活動」でいいのかということですね。特別活動においては、いわゆる生徒会とか学校行事とか、学級活動といったものを統合した表現が特別活動であって、学習指導要領上は、一、目標、二、内容というくぐり整理がされていることを踏まえることが大切と考えます。特別活動における活動という視点に立ったときには、今までも委員の先生方から意見が出ているように、自主的、実践的な活動であるとか、自治的な活動であるとか、という場面で使われる方が多い文言であったわけですが、平成20年の学習指導要領の解説書においても、それらが混同されている部分があるわけです。そういう部分については、今後整理をしていく必要性があるということですね。

それから、資料2の並べ方について御意見が中心になってきているわけですが、先生方の御指摘のとおりだろうと思います。ただ、これはイメージ図として、それぞれの各内容の関連を示したものという捉え方でいいのかなと。その発展的な部分についても一番右側上、上下にあるこの四角括弧の表現も、更に違う表現に当然なってくる部分があるという、話題提供的な要素も多分にあるのかなと思っています。学級活動が中核であることには変わりはないわけですが、しかし、それは中学校も高校もそうなのか。特に高校はそうなのかということを考えたときには、高校などでは学校行事から学級活動、ホームルーム活動に戻ってくると言いますか、そういうベクトルと言うか、矢印の活動が中心である場合もあるわけです。

先ほど申しましたように、資料3については御議論いただけませんでした。こういう形でプロセスをお示しいただくことはいいわけですが、先ほど申し上げましたように、活動のプロセスということで捉えたときには、子供たちの活動というのは自主的な活動、自治的な活動。特別活動においては、大きくそこは二分されるので、特に学校行事などは、子供たちに生徒会活動・児童会活動などを通して、いわば自主的に活動させる部分もあり

ますし、自治的な活動をされては困る部分もあります。こういう一つのプロセスとして表し切れない部分もあるということですね。やはり活動というのは自主的・自治的な部分での内容という形でのプロセスの方が整理はしやすいのかなというのが、一つの視点でございます。そんなふうに先生方の意見を伺っていて感じました。

それから、資料3のこの中身については、更に御議論いただく必要性があるのかなと思います。例えば、学級活動などにつきましては、いわゆる自己管理に関する集団と個という話が白松委員からも出たわけですが、集団と個の統合を図るのが、学級活動の大きな視点でもあります。集団というのは、いわゆる協働、論点整理の文言を借りるならば、そして個というのは自己管理ということですよ。そういう大きな二つのくくりの中で、これからの学級活動を捉えていかなければなりませんし、子供たちが将来生きるであろう環境を捉えたときには、論点整理などにもありますように、ルールを前提とした社会ではなくて、グローバルな異文化の中で生活するためには、自己管理がしっかりできてルールを前提にしないで協働ができる子供たちを志向していく必要があるだろうということを考えたとき、やはり学級活動の方向性と言いますか、内容も大きく変えていく必要があるのかなと、今回の改訂ではそんなふうに捉えました。以上です。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。資料の3あたりも御意見をいただきたいところですが、まず、資料2の方は、失礼ながら、各特質をそれぞれ厳密に考えて、往還を考えたというよりも、社会に開かれた教育課程ということで、社会とのつながり、発展に行くべきだというイメージで捉えたということが実情なのでしょう。けれども、さっき出ていたように、学級活動を中核とするような考え方はあってもいいのではないかとということで、そこは押さえながら社会との関わりということで、これを往還的に広げるといふふうにしてみる。しかし、特質を全部考えていったら、実際問題、平面に表すのはなかなか難しいのではないかと思います。その辺は工夫していただいて、できるならば特質まで含んだ往還ができればなおよいと思います。最低、学級活動を重視した、中核にしたということは、共通理解しているのではないかと思います。

大杉室長、どうぞ。

【大杉教育課程企画室長】

もともとは御指摘のとおりです。それぞれの内容の意義と言いますか、社会にこれから子供たちが生きていくに当たって、どんな社会の機能や、役割、活動に関わっていくのか

ということと、特活の内容ということが密につながっているのではないかとことを改めて整理しようとしたペーパーではあったのです。一方で、今日御議論いただきまして、特活の全体的な構造を分かりやすく構造化したものも一つ必要ではないかと捉えております。私どもにとってはチャレンジですが、是非もともとの資料の意義とそういった構造を二次元で何とかできるだけ工夫してみたいと思います。そうしますと、多分、生重先生に御指摘いただいたような、なぜそのつながりを表示するのかと、まさに地域を支えていく子供たちを育てていくことに特活が重要な役割を果たしているということが、関係者のみならず地域の方々にも共有できるような、そんなペーパーにできるように、少し頑張っていていきたいと思いますので、引き続きそういった視点からもコメントをいただければと思います。失礼いたしました。

【貝ノ瀬主査】

いえいえ。少し大変ですけれどね。杉田委員がおっしゃるように、建て増し建築みたいで相当歴史があるのでなかなか難しいかと思いますが、チャレンジしてもらいたい。

藤田委員，どうぞ。

【藤田委員】

今せっかくまとめに入っているところで横から申し訳ないです。資料2で、最初に申し上げたように、図は分かりやすいですけども、多様な解釈を生んでしまうので、細かく書き込めば書き込むほど、何が何だか分からなくなるということとのせめぎ合いだと思いますが、やはり二次元にせよ、三次元にせよ、X軸、Y軸、あるいはZ軸の軸の説明は、絶対に必要だろうと。そういったときに小・中・高の全体像を読み取りながら、また、個と集団との関係を含み込みながら、どう表現していくのかというのは非常に難しい問題ではあります。ただ、今回、時間の広がりや各活動、各内容が社会生活やこれからの将来にどう関わっていくかということを示してはいるのですが、学校行事一つを挙げても、儀式的行事を捉えれば、確かにそのとおりですが、旅行・集団宿泊的行事ですとか、勤労生産・奉仕的行事ですとか、健康安全・体育的行事といったところまで踏まえると、クラブ活動とも重なってきますし、あるいは学級活動とも重なってくるだろう。ですから、図であるものの、やはり特別活動の各内容の豊かな広がりというのが、逆にこうしてしまうことによって、わい小化してしまうのはもったいないなということを感じたということが、この資料2に関しての感想です。すみません、今頃申し訳ないです。

それから、資料3です。これは須藤先生もおっしゃったことですが、特に学校行事など

では、次の活動や課題解決へと大きな特活らしさは出ているのですが、例えば、儀式的行事の中ではそういったことがしかねるといえるのか、本来そういう構造になっていないものもある。そういったものを概念的に整理するというのは、例外があるので難しいにせよ、学校行事については、もう少し丁寧な書きぶりが必要なのかなと思いました。ただ、杉田先生もおっしゃいましたように、これまでこういうプロセスがきちんと各内容ごとに見えてこなかった、整理されてこなかったということからすれば、非常に大きな資料提示になるのかなと思いました。

それで、今日の話、今話すべきことになるのかどうか分からないのですが、資料5でこれから多分出てくることだと思うのです。ほかの各教科や総合的な学習の時間等もそうなのですが、学びに向かう力・人間性等の評価のところで、何々しようとする態度という形で触れられているかと思います。これから、後半キャリア教育についても議論されていくことかと思うのですが、今日、大杉室長から御説明がありました資料8の20ページのところで、「主体的に学習に取り組む態度」に関して、観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価も必要だと。個人内評価というのは、例えば、ポートフォリオなどもそうだと思うのですけれども、この「しようとする」とか「考えようとする態度」というのは、どういうものを指していくのか。心の動きですから、心というのは見えないものなので、結局外面的な行動に現れたり、記録に残ったものを評価していくと思うのですけれども、そうするとポートフォリオの評価はどうしていくのか。ここではこのワーキンググループではないにせよ、もう少し詰めた議論をしていただかないと、今後、評価の部分で大きな問題が出てくるのかなということを感じました。

それから、この学びの資質・能力の三本柱との関係でいきますと、これから話し合うキャリア教育との関係もそうですけれども、特別活動の場合ですと、学級という社会、学校という社会、そして地域社会という大きな広がりの中で、例えば、参加から参画に、高等学校に向けて変わってくるわけですが、そうすると、知っていること、できることをどう使うかという議論と、どのように社会、世界と関わりよりよい人生を送るかということの線引きがはっきりした黒い線では引けなくなってきました。例えば、社会参加、社会参画という言葉をどんどん使い始めれば、そういった意味で、これが点線やあるいは別の形の表現の仕方が出てくるのか、出てこないのか。こういったことが特別活動、特にこれから議論するキャリア教育との関連では、論点の一つになってくるのかなと、そんなことを思いながら話を聞いておりました。すみません、今頃申し訳ありません。

【貝ノ瀬主査】

まさに循環なのでしょうね。その資料5は後半にやりますので、またお願いいたします。

【藤田委員】

はい。

【貝ノ瀬主査】

とりあえずですけれども、資料2について議論が集中しましたが、お話のとおりでして、それほど深読みするような資料でもなかったということでしたね。

白松委員。

【白松委員】

資料2について2点です。例えば、身近な生活改善ということになると、上軸は学級活動で、広範な社会・集団ということの改善ということであれば、下軸は児童会活動、生徒会活動が置けるのかなと、まず一つ思いました。

次に、資料3について1点です。クラブ活動についての資料3を読んだときに、かなり画期的だなと思ったのが、クラブを自分たちで運営していこうということが割と明確にこの資料3に書かれていることです。そうなれば、例えば、式典や行事などへの参画についてです。生徒たちがより自治的というよりは、主体的にいかに関与するかという態度をつくるどころが行事だとするならば、その横軸の反対側にクラブ活動、むしろ新たに絆をつくったり、新たな組織をつくったりということになっていくと、参画というよりむしろ自治的にそういう組織を自由につくっていくということを考えると、構造としてはその方が軸として対比できるのかなと単純に思いました。上の方が個や身近な集団で、下が広範。左側が参画と、右側がいわゆる主体的組織づくりとか、自主的組織づくりのような図になるのかと思ったので、感想として挙げます。

もう1点、ポートフォリオ評価のことを今、藤田先生がおっしゃいましたが、私は学級活動でそういうポートフォリオのような日誌をつけておられる先生から、いくつか資料をもらったことがあります。その中に書かれているのが集団認知と個人認知です。今日、学級会で話し合ったことと、クラブ活動でやったことで、どういうことを感じたのかとか、その集団認知に関してというのは、どのように変化したかを追っていくと、評価は可能かなと思いました。自己認知ですが、自分を生かそうとするようになったのか、それとも自分が何もできないまま認知しているのかということでは若干評価は違ってくるかなと思うので、特別活動のそういう評価用の資料のようなもので、個々人が書くものがあれば、不

可能ではないと思います。ただ、今の状態では、あまりにも教科に寄り過ぎてしまって、評価が不可能な可能性は高いかなと思いました。

【貝ノ瀬主査】

提案もありましたが、橋谷委員、お願いいたします。

【橋谷委員】

資料3についてですけれども、こんなふうに各内容のプロセスが意義や役割としてまとめられたというのは、とても素晴らしいと思います。学校行事につきましては、御意見がたくさん出され、そのとおりでと思いますので、クラブ活動について少し話をさせてください。クラブ活動は、所属を決める際に、子供たち自身が自分のよさ、自分の個性など、自分を知ることからスタートします。この自分のよさや可能性を生かそうとする態度を育むクラブ活動は、将来自分の在り方、生き方を考える上でとても大切だと思っています。けれども、今、時間の確保がされていなかったり、クラブ活動の意義が認識されていないのではないかと感じたりする現状もありますので、こんなふうにまとめていただくと大切さが分かりやすく伝わるのではないかと感じました。ありがとうございます。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。私もこのプロセスの資料3は、とてもよくできているなと思って拝見いたしました。

資料2は、藤田委員がおっしゃるように、ピンク色の縦軸、横軸が思わせぶりだったのですよね。ですから、特別な意味があるというように受け取られてしまうので、白松委員がおっしゃったような、そういう分け方も参考にして、少し御検討いただくということをお願いしたいと思います。

小林委員も御意見ありますか。

【小林委員】

資料3の方ですけれども、よろしいでしょうか。

【貝ノ瀬主査】

いいです。

【小林委員】

今、お話にありましたように、プロセスが明示されていて分かりやすいと思います。1点、「問題の発見・確認」のところで考えました。そもそも問題に気付く、問題として認識するということは、理想があり、理想とのギャップが問題であるとするならば、そもそ

も理想をもっていないと問題に気付けないのではないのでしょうか。そうすると、他のプロセスにある「よりよい生活をつくろうとする態度」、「情意」という言葉も使われていますが、そういった心情がないと、問題にも気付くことはできないのではないのでしょうか。「問題の発見・確認」のところに同じように、提示してはどうかと考えました。

もう一つは、「よりよい人間関係を育むための思考力・判断力・表現力など」が、どの活動も真ん中であって、どのプロセスにも関わるとなっています。同じように、「よりよい生活をつくろうとする態度」、自分の生活であったり、集団の生活であったりということも、全体に横たわるといふか、関係すると思いました。以上です。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。小林委員から情意の重要性についても御指摘がありました。特活では非常に重要な部分だと思います。いろいろ御意見が出ましたけれども、今日の御意見を基にして、可能な限り、また少し手直しなどもできればと思いますので、よろしくお願ひいたします。

では、次のテーマもございませう。引き続き、二つ目の議題の「キャリア教育の視点をもった特別活動の充実」の論点に入りたいと思ひます。

議論を始める前に、資料6として、和田委員から資料の提供をいただいております。本来でしたら御本人からということですが、御欠席ですので、代わりに事務局から御紹介いただきたく思ひます。

【長田教科調査官】

では、資料6についてです。和田先生よりお手紙をいただいておりますので、そのまま代読をさせていただきます。

特別活動ワーキンググループの皆様、今回の会議でドリカムプランの紹介をさせていただく予定でしたが、インフルエンザにかかり出勤停止となりました。直接御説明申し上げできず、申し訳ございませぬ。

本日紹介させていただきますのは、ドリカムプランの中でも、和田が福岡県立城南高等学校に在籍しました平成6年度から14年度の9年間の内容です。その後、ドリカムプランは再構築され続けていることをはじめにお断りいたします。

城南高校でドリカムプランをスタートさせたのは、21年前のことになります。ドリカムはその後の総合的な学習の時間やキャリア教育の先進事例として、全国的な注目を集め、今また、アクティブ・ラーニングの事例として注目を集めているように思ひます。以下、

資料6を御覧いただきながらお聞きください。

1 定義。ドリカムプランを一言で言うならば、生徒主体の進路指導です。平成6年度の第1学年の取組として始めました。

2 概要。平成6年当時、城南高校の概要です。昭和39年開校。創立30周年を迎えていました。全日制普通科です。1学年10クラス。440名がほぼ大学進学し、うち国立大学現役合格者が110名程度でした。福岡県の第7学区にあり、同学区には修猷館高校がございまして、それに次ぐ学区内2番手の進学校。いわゆる新設、スパルタで知られる存在でした。

3 導入の背景。平成6年4月、平成元年告示の新教育課程が学年進行で始まった年でした。新課程では、「新しい学力観」に代表されるように、関心・意欲・態度にスポットが当たっていました。しかし、その具体的な方法については、各校に任されており、正直に言えば、「新しい学力観」に立った教科教育法が分からなかったのです。当時の城南高校にはもう一つ深刻な事情がありました。この年、近隣の私学の台頭により、従来入試上位者層と捉えていた層がさらわれた年でもありました。新教育課程と私学の台頭という二つの危機感に見舞われていた城南高校の教師は、4月以降、入学生の明らかな変容という形で、危機感ではなく、危機を目の当たりにすることになりました。

4 ドリカムプランのスタートまで。「新しい学力観」について、第31期生学年団による情報収集が始まりました。切羽詰まっていたので、情報収集というよりも探索が始まったと言った方が適切かもしれません。そんなときに、宮崎県立宮崎西高等学校を訪問する機会を与えられました。迷いを露骨に見せる我々に、当時の宇田津校長先生から、「大学卒業後こそ人生の本番」と叱られました。その学校訪問の帰りには、ドリカムプランの構想ができて上がりました。生徒の興味・関心に応じて、将来のために役立つようなことなら何でもやってみようと、この年の10月29日、ドリカムプランがスタートしました。

5 活動内容を時系列で。マル1、宮崎西の学校訪問から帰ってすぐに、生徒の興味・関心を知るために、進路希望調査「10年後の私、20年後の私」というアンケートを取りました。これは後に入学直後のドリカム作文に変わっていきます。

マル2、同じ志をもつ生徒を集めてドリカムグループ分けをしてみました。最初は16グループありましたが、2年目には整理の結果、9グループとなりました。表1を御覧ください。「10年後、20年後の私」のアンケート結果でありながら、結果的に大学の学部分けに似たものになりました。グループの移動は自由です。

マル3、学年集会を開き、自分の将来のために役立つような活動なら何でもやってみよ

うと呼びかけました。これがドリカム活動です。英語を使った仕事を希望する生徒の英検取得が分かりやすい例かと思います。医療保健を志す生徒が、1日ふれあい看護体験を自分で見つけ、自分で申込み、活動することもありました。

マル4、職業人講演会は、経済同友会などの力を借り、社会人による体験講話です。グループごとに受講します。これは後に全国の中学校や高校に広がった事例です。

マル5、シラバスレポート。大学のシラバスを高校生が読んで、私の学んでみたい講義としてまとめ、グループで共有します。今ではインターネットで何でも調べられますが、21年前、この発見は画期的でした。それまで学部・学科名でしか推し量ることのできなかつた大学の中身を高校生が知ることができたからです。

マル6、オープンキャンパスについては省略いたします。

マル7、ジョイントセミナーは、大学教官による講座です。今では各大学の出前講座の案内が高校にたくさん来ますが、当時は趣旨を理解していただけず、「入試があるのに特定の高校と結び付くことはできない」と断られる中、教師が飛び込み営業で20講座以上をつくりました。

マル8、課題研究は、4、5人を1班として、班で課題研究をいたします。テーマはもちろん、自分たちで設定します。A4版、10枚程度のレポートをまとめ、プレゼンテーションまで課しました。当時はまだ教科「情報」が始まっておらず、インターネットやプレゼンテーションという概念さえ新しく、インターネット講座など、初歩的な指導から丁寧に行ったことを覚えております。

大きな6 活動時間。これらの活動を時間割のどこで実施したかという点、特別活動です。特にホームルーム活動。時には10クラス合同のミックスホームルームの形式、いわゆる学校行事として取り組みました。

さて、31期生も巣立ちの時期を迎えました。生徒たちは第1志望が揺らぎません。1年生のときから自分で調べてオープンキャンパスに出かけ、自分で動き、ジョイントセミナーを参考に自分で意思決定をしているからです。正直我々は、合格実績としては惨敗するのではないかと心配していました。

7 進路実績。御覧ください。上段は年度。下段は国立大学現役合格者数。太線がドリカムプラン開始の年度でございます。結果的には100から200への倍増でした。これには私たち教師の方が驚きました。要因を分析すれば、一つには国立大学の推薦A0後期入試の合格者増があります。ドリカムで活動してきたことを受験の際に活動履歴書として添付し、

面接や小論文で生徒たちは自分のやってきたこと、思いのたけを語ります。概念的ではない、具体的な志望動機が面接官の印象に残ったのではないかと思います。この活動履歴書こそ、近年幾つかの県で行われるようになったキャリアノートであり、先般の藤田委員の紹介事例にあったキャリアパスポートに当たります。生徒は一律に、「受験は楽しかった」「思い切り言えたから不合格でも悔いはない」と帰ってきました。

また、二つ目、生徒のモチベーションアップがあります。「志が千里を走る」と言いますが、自分の中にやりたいことや明確な目標が定まったら、生徒は自分で走り出します。モチベーションは学力にフィードバックされたわけです。何のために学ぶのか、この努力は生きることや働くことの何につながるのかを意識させる重要性を再認識いたしました。進路実績のみではなく、ドリカムによって学校全体が活性化し、例えば、部活動の全国大会出場も増えました。

8 ドリカムの意義。それは、「教師主導の進学指導」から「生徒主体の進路指導」へのモデルチェンジでした。

9 ホームルーム活動とドリカムプラン。ドリカムプランは、中教審でも取り上げられるなど、その後、全国的な注目を浴び、総合的な学習の時間の先進事例として多くの学校訪問を受けることになりました。取組を説明した後、ある先生から、「そんなのはどこの学校のホームルームでもやっている」と評価されたことがあります。そのとおりです。どの高校のホームルームでも、どの中学校の学級活動でも行われていた進路指導を体系化して、「ドリカムプラン」という名前をつけたものでございます。言うなれば、高校のホームルーム活動において長年にわたって培われてきた進路指導そのものです。高校生にとって自分のキャリアを展望する時間は、ホームルーム活動です。その意味で、ホームルーム活動は長年のキャリア教育の機能を果たし続けてきたのだらうと思っております。

以上でございます。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。

では、議題の二つ目の論点、「キャリア教育の視点をもった特別活動の充実について」ということで、資料1と資料4、資料5を基に、議論を深めてまいりたいと思います。今のドリカムプランのお話も参考にさせていただきながらということ、お願いいたします。御質問、御意見のある方は、また名札を立てていただいてということをお願いいたします。

さすがに今は進路指導、進学指導と同じように考えているところはないと思いますけれ

ども、今の和田委員のお話はなかなか大変な成功事例としてのお話だと思いました。いかがでしょうか。

では、藤田委員、お願いします。

【藤田委員】

皆様方の本格的な議論に入る前に、些末なことを2点だけ。資料4で、この部会として見ると本当に些末なことになってしまうのですが、私の中では些末ではなくて、この資料4の一番下の幼児教育です。自分で考え、自分で行動する、自分でできることは自分であるというまとめをされているのですが、ここは特活等の関係性でいきますと、少しもったいないまとめかなと思いました。釈迦に説法ではありますが、幼稚園教育要領などを見ますと、人間関係という大きなカテゴリがあって、ほかの人々と親しんだり、支え合って活動したりするということが大きな柱にあって、その中に内容の項目の一つとして、自分で考え、自分で行動するというのがあるので、人間関係形成、あるいは集団形成というものを前面に出していただいて、その上で自発的な活動、自主的な活動、主体的な活動が、下部構造にくるように書き直していただくと、特活との関係も、キャリア教育との関係もより見えてくるのかなと思いました。これが1点目です。

あと、これも本当に小さいことで、この資料4、資料5、それから、今、和田先生のお話をお聞きして思ったことですが、これから議論するとき、高等学校の「公共」が資料4に米印で書いてありますが、これとの関係をどのように整理するのかというのは、今日の議論ではなくて、今後の議論として重要なことだと思います。先ほど杉田先生からも歴史的な経緯が御説明がありました。もともと進路に関する活動、特に学級活動、ホームルーム活動が中学校・高等学校に入ってきたのは、昭和30年代、特に中学校の職業家庭科というものが当時あって、それが進路学習を担っていたものの廃止されて技術家庭科になったときに、行き場を失ったものが、今で言う特別活動のホームルーム活動、あるいは学級活動に入ってきたという経緯があります。もともと系統性のある教科としての学びだったわけですが、仮にこの新科目「公共」に入るとするならば、特別活動との関係は大きく、特に高等学校の中で見直す可能性もないことはないだろう。ですから、これは今日のことでなくて、今後の「公共」との議論との関係が非常に重要になるのだろうと感じたということだけ申し上げたかった次第です。本当に入り口のところですみません。

以上です。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。ほかの方はいかがでしょうか。

吉村委員，お願いします。

【吉村委員】

キャリア教育で論点整理の資料を見ても，単に職業的な面だけでなく，社会的な自立というものが，職業的自立と並んで書いてあるわけです。そういう点で，ここにおられる方は御承知のことだと思いますが，まだなかなか進路指導から抜け出れていないのも現状としてはあると思うのです。それで紹介ですが，イギリスでは21世紀に入りまして，シチズンシップという新教科ができました。イギリスでは，そのシチズンシップの中に政治的なりテラシーを育むものといろいろなものとを並べて，シチズンシップの中でキャリア教育のようなものもやっている。そこでは，職業的なことも当然やっていますが，シチズンシップの枠の中で職業的なものも，社会的なものも，また，そういう政治的なりテラシーのようなものも一緒にやっています。キャリア教育を単に職業的なもので縮めてしまわずに，働くことが社会でどういう意義をもっているのか，また，個としては職業を通じて社会で自分を生かしていくのだと，そういうことで自分が社会を支えているというような意義も感じ取れるように，うまく何とか接合しようというような工夫が見られているのが現状であります。そういう点でキャリア教育の系統性について，この資料4の右側に答申の文言が入っているわけですし，ここに「社会における」というものもきちんと入ってきていて，18歳選挙権のこともありますので，そういった職業的なものとシチズンシップ教育的なものをうまく接合させるような工夫ができればいいかなと思っていますが，それは多分，具体的な活動の内容とも関連してくると思います。だから，それは，今日はなかなか難しいかもしれません。以上です。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。

では，脇田委員，お願いします。

【脇田委員】

「キャリア教育の視点をもった特別活動の充実について」ということで，資料4にも示してありますけれども，小学校は希望や目標をもって生きる態度の形成，清掃などの当番活動等，役割と働くことの意義の理解というのが表記してあるのですが，これは学級活動の内容の2の共通事項に示してある二つの項目のことなのです。ということは，これまでも学級活動の内容の2について，熱心に取組をされる方は個々で指導をやってこられたわけ

ですけれども、特別活動はこれだけではありません。共通事項も、小学校は内容の2がありますが、小学校が七つで、中学校はもっと増えます。高等学校だともっと増えます。それで内容の3もあります。ここは整理をしておかないと、特別活動は一体どういう資質・能力で、今のところだったら、人間関係形成能力とか、社会参画の能力とか、自己実現といった資質・能力になっていくのだったならば、キャリア教育が大事だということは分かっております。けれども、このあたりを整理しておかないと、重点的に扱えるのですよというふうにしておかないと、あれもこれもとなってきたり、結局は特別活動は何なのだとなくなってしまう。私たちは、学級活動をしながらか、学級会とか児童会で子供たちが自分たちの問題を見つけて、自分たちの学級や学校の生活をよくしていくという主体的な態度を育ててきた。それで学校は変わっていったということは、幾らでも全国にあるのですけれども、あまりにもこのキャリア教育の重要性がずっと出て来ると、先ほど言いました共通事項とか、内容の2、3の整理などが全然できないまま、このままいくと何もかもやらなければいけないという捉えになっていくのではないかとこのころは懸念いたします。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。

黒木委員、どうぞ。

【黒木委員】

私の県では、現在、学力向上の施策の一つとして、キャリア教育の視点に立った、確かな学力の向上ということを推進要綱の中に盛り込んでやっております。その中で、なりたいた自分となれる自分を意識した教育を低学年からしっかりやっていくということが打ち出されております。その視点に立ったとき、私たちは特別活動の中で、よくその学校の卒業生を招いて、教師と一緒に授業をやっていたりしております。特にその中で、私たちが一番大切にしているのが、小学校6か年、中学校に上がる前の間に、自己決定する力をしっかりと付けていきたいということです。それが将来的な進路選択だとか、様々な選択能力を育む力になるだろうと考えています。特別活動イコールキャリア教育ではありませんが、キャリア教育はまさしくそういうところに視点を置き、見ていくことも大切ではないかということから、現在本県では、キャリア教育の視点を各教科の中に位置付けて実践しています。以上であります。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。実践例もお話いただきました。

白松委員，お願いいたします。

【白松委員】

東京ディズニーランドに行ったときのことで。日本だけなぜあれだけリピーターが多いのかと思っていたのですが，パートナーが創意工夫をして，例えば，待ち時間が長い所の前では，ミッキーの絵を水で描いたりするサービスが始まるなどし，実は東京ディズニーランドの成功は日本の特活文化にあるのかなと見ていたことがありました。うちの娘が「お帰りなさい，プリンセス」と言われて上機嫌になったこともあるかもしれません。そういった中で，特別活動には，企業の文化を新たに創造していくという機能があり，一つのキャリア教育とか，その家庭生活であり，地域生活であったりというところを，社会的自立の中で豊かにしていくのだらうと思いました。それがどうしても，(2)の方だけを中心に見てしまうと，十分書き切れないところがあるのですが，そういったところも，もし入るようだったら入れていただけるとありがたいなと思いました。(2)(3)の方を中核に据えていくのなら，先ほど黒木委員もおっしゃられたのですけれども，やはり自己理解，自己指導能力，自己決定能力というのはかなり重要なキーになっていくと思います。そういう意味では，例えば，当番活動一つにしてみても，自分がどういう自己決定をしてそれに取り組んでいるのかということがおざなりにされていることが一つ問題なのかなと。モラトリアム期間というのはかなり長くなってしまって，どうしても学校の中が社会と分断されたというのが大きな問題だとするならば，そういった接続性というのは運用の段階での接続ということを改めて問うことで考えたときに，キャリア教育から今既存の特活の見直しが非常に重要なポイントなのかなと思っています。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。

橋谷委員，お願いいたします。

【橋谷委員】

間違っていたら教えていただきたいのですが，川崎市はキャリア教育を新しい教育プランにおける学校教育の重点施策として位置付けています。それで，本校では，特別活動を核にしてキャリア教育に取り組んでいくのですが，私は，特別活動のどの内容も一生懸命やれば，キャリア教育で育てたい基礎的・汎用的能力が育つのではないかと考えています。では逆に，キャリア教育をやったら，特別活動でねらっていることが達成できるのかといたら，それはどうだろうかと疑問に思います。例えば，特別活動には，自治で

あったり、生徒指導の機能であったり、為すことによって学ぶという特別活動の特質や意義があります。特別活動を特別活動の目標に向かってきちんと行えば、それはキャリア教育になるけれども、キャリア教育をやれば特別活動になるかといえば、それはならないと思っているのですが、いかがでしょう。意見というより、質問になってしまってすみません。

【貝ノ瀬主査】

いやいや。さっきの脇田委員と共通するような課題が、今、具体的に提示されました。では藤田委員、引き続きお願いいたします。

【藤田委員】

今、脇田先生、橋谷先生がおっしゃられたことに私なりの感想ですけれども、まずそれを1点と、資料4についてのこと、2点申し上げたいと思います。

まず、最初の感想ですが、今まさに橋谷先生がおっしゃってくださったように、特別活動は特別活動をすべきだと思うのです。それを俯瞰して捉える。横文字を使うとメタ認知をするときにはキャリア教育としての価値を見出すことができる。それをちゃんと俯瞰して捉えて、ここにキャリア教育の価値が同時にあるなということ認識して指導にあたるか、それを認識せずに指導にあたるかの差だと思うのです。ですから、キャリア教育が重要視されることによって、特別活動が侵食される関係ではなくて、特別活動は特別活動のねらいに沿って、まさに自主的・実践的な活動、自治的な活動を中核として、これからも揺るがぬ地位を確保できるものですし、しなくてはいけないだろうと思うのです。そのときに俯瞰をして捉える。メタ認知をどうするのか。そこでキャリア教育との関係をどう整理していくのかということが重要なのかなということをお二人のお話をお伺いして思ったことが1点でございます。

2点目、資料の4ですが、そういう見方をして、特別活動、特に中学・高校、(1)(2)(3)があるわけですが、この資料4を拝見していると、どうも(3)のことを念頭に置いて進路指導という言葉を使い、キャリア教育という言葉を使っているのではないかと。この資料4の右側の中教審の答申を見ますと、特にその一番上の方ですけれども、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度を育成する。この能力については、先ほど御説明がありましたように、基礎的・汎用的能力で、先ほどまた白松先生からもお話がございましたように、人間関係形成、あるいは社会形成と同時に、自己理解、自己管理というのも大きな四つの能力の中の一つに入っています。となると、ここで言われている(3)

に力点を置いた書きぶりだと、キャリア教育とは高校を選択して、大学を選択して、就職先を選択して、選択するのだよねという話にどうもいってしまうのではないか。もちろん、それがないと社会生活に参画するルートが断たれてしまうので、とても重要なことですが、そこで自己理解や自己管理、あるいは人間関係形成、社会形成、それから、課題対応といったものの重要さが、この資料4の向かって左側からは少し見えにくいなという印象をもったことを申し上げたいと思いました。以上です。

【貝ノ瀬主査】

はい、分かりました。

生重委員，お願いします。

【生重委員】

私も特別活動からキャリア観を伸ばしていくという観点なのではないかと思っています。特別活動は大事とずっと外から言い続けてきているのは、そこにあります。例えば、集団で話し合う、自分たちの学級をよくしていくという、今そこが軽視されているのをすごく憂えています。自分が思ったことを表現していいのだと、意見を言ってもいいのだという体験が、小学校段階から自信につながります。聞いてくれる人がいて、自分のもっている考えを発表していいのだと、そこからまた人の話を聞いて考えを深めるのだと、その繰り返しの関係性が育たない限り、自分がどう生きていくかというところに行き着くわけがありません。学校教育においては、特別活動を通して、その学年の発達形成段階に応じたキャリア観を育てていくことが大切です。どうしても、先生たちは、勤労観、職業観等に段階を飛び越えて行ってしまいます。発達の段階に応じて、視野を広くもって社会に通じるということが、前半の議論にあった図にうまく出るといいなと思ったのは、これが子供たちの成長段階におけるキャリア観につながっていくのではないかという思いがあったからでもあります。通るわけがないことを承知の上で、すごく大胆なことを言わせていただきます。先生たちは時間がないと言います。先ほどの九州の和田先生のお話は、本当に素晴らしいです。先生自らが子供たちが自分で選択できる力を伸ばしていこうと、どんな危機感があっても、ここに行き着いた先生たちは素晴らしいです。今、本当に自分の学校が廃校になろうとしているにも関わらず、申し訳ないですが、何もしていない先生たちをたくさん見てきていると、ここまできちんと自分たちが置かれている現状を踏まえ、自ら子供たちの意欲喚起をしようと思えたということは素晴らしいです。

それともう一つ、アクティブ・ラーニングといういろいろな本が出て、中教審の中でも

打ち出されています。これは新しくなく、よく授業をし、よく学級運営をしている先生たちはずっとやっていたのです。それは見てきています。そこに新たな名を付けなければいけなくなった、その間の事情はあるのですけれども。今、またその間の事情と全く同じようなことが起こりつつあって、学ぼう、学ぼうとすればするほど、近い先輩から教わってきていることがない分、尊敬する人の模倣になってしまって、習った人の形をそのまままねてしまうという、あちらこちらでそういう現象が起きつつあるというのをとても懸念しています。結局、「ああ何々先生、そのままだね」となる。先生としての個のキャラクターとか、先生の個性でクラスのカラが決まってくるし、その中で子供たちの力をどう引き出していくのかというのが、学級担任の務めであろうと思うのです。そのアクティブ・ラーニングをやらねばならぬとなる前に、熱心であるがゆえに勉強し過ぎて、何々先生をまねてしまうみたいなことはとても危険で、だから、最初の大杉さんからの御説明の中で、もっといろいろな型を見せていく必要があるのだということは、本当に積極的に早めにやっていただかなくてははいけません。これと同じことがキャリア教育という言葉が入ってきた歴史の中にもあって、職業を体験させればいいのしょうという、非常にシンプルなところに陥ってしまいました。時間がない、忙しいという言葉が出ないようにするためには、私は何度も繰り返して言いますが、コミュニティ・スクールであり、みんなで地域総がかりであります。学校の教育方針を受けた運営する側、コーディネーター側が、学校と打合せをしながら、ある程度、仕事の軽減化をし、子供たちに本当によく考える時間を与え、引き出していくという、最も教育の最前線の部分を先生が担わないで誰がするのでしょうか。電話をしたり、外回りをしたりすることが先生の本来業ではないのだということを、もう一回ちゃんとどこかに書き記す必要があります。先生は何もかもまじめなるがゆえに、全部自分がやるのだと思い、たくさん先生たちがつぶれていく状態になっていきます。意外とグループ作業が苦手な先生たちが多く、仕事を分けるのが下手な先生も多く、チームの中でも頑張れば頑張るほど孤立してしまうこともあります。

もう一つ、中学、高校に行くと部活の問題があると思います。部活も学校こそが全知全能だ、特別活動だと、放課後の部活は勤務時間外に、先生たちの奉仕状態で今行われています。この話をここでしてよいか分らないですが、私の考えでは、オリンピック選手や有能な選手もいるので、地域の中のスポーツとして、学校と情報を共有化し、協働していくことが大切だと思います。部活に向かない子たちはスポーツや文化活動ではなく、地域であるとか、本当に社会参画していくことで、自分自身が認められ、そこに場を与えられ

ることで自信を取り戻して、そこから学びのモチベーションを上げていきます。そういう小学生・中学生・高校生をたくさん見てきており、そういう活動は社会の中にあるのです。日本という国の未来を背負う若者を様々なところで育てていくという大きなところに、今回が無理でも次の回には行きたいと思っています。子供はやりたいことに気付き、やれたときに能力を伸ばします。そういう子供の能力を伸ばす体制をどう整えていくか。それは社会の体制であり、学校の許容量の広さというか、広げ方の問題ではないかと思っています。キャリア教育というのは、学校だけがどこかに誰かを預けて成立するものではなく、もっと社会全体が広く受け止めて成立するものだと考えています。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。

では、小林委員。

【小林委員】

資料5の下の「学校内での学びとその学びにリアリティをもたせる実社会での体験活動」で、「職場体験との往還を重視」という表現があります。これはもちろん大事なことだと思いますが、今、生重委員の御発言にもあったように、あるいは、前回、藤田委員に御提出いただいた資料の中にも、「なんだキャリア教育というのは中学で職場体験をさせればいいのか」という危惧があるとございましたが、そういったことを助長するようなことにつながらなければいいなと思っております。

一つ事例を御紹介します。長崎県の私立高校ですが、総合の時間を使って「夢マップ」という主体的に進路を選択する力を身に付けるという実践をしています。現状は、日常生活において主体性が発揮できていない。自分の考えが言えない。自分の考えが言えないのは、間違ふことに対して受け入れられるかどうかという心配、恐怖があるからです。そこで、1年生が、私ども諫早自然の家で、2泊3日の集団宿泊活動をしています。目的は、自己肯定感を育てていくということです。自分の生き方や考え方に向き合い、これでいいのだということ気付かせる。もう一つは、安心して自分の考えを言える仲間づくりです。こうした実践により成果を上げています。従前より応募者数が増えたり、甲子園にも出場したりしています。このようにキャリア教育を職場体験と結び付けるばかりでなく、基礎的、汎用的な能力を築いていく場であるということアピールすることが必要と思っております。集団宿泊活動は自然の中での体験活動ということだけではなくて、キャリア教育の一環でもあると捉え直すことができると考えます。

【貝ノ瀬主査】

藤田委員，その後，杉田委員。

【藤田委員】

2点ございます。これは先ほど言いかけたことと重なることなので，重複してしまうこととお許しください。1点目は，資料5でございます。先ほど少し申し上げましたけれども，思考力・判断力・表現力，知っていること，できることをどう使うのかということと，学びに向かう力，人間性とどのように社会，世界と関わり，どのような人生を送るのか。これは特にキャリア教育においては，実践的に分けることがとても難しいという感覚をもっていることの繰り返しです。例えば，小学校の3ポツ目，真ん中の欄と右の欄を見ていただくと，ほぼ同じことなのですね。文末が違う。通そうとする態度か，することができる力。中学校の4ポツ目，やはり同じなのです。キャリアを思い描こうとする態度，主体的に判断してキャリアを形成していく力。結局，こういう表現ぶりの違いを生み出すことになってしまう。これは事務局の皆様方が責任を負うべくことではなくて，キャリア教育の性質がそういう性質なのではないか。ですから，このところをどう切り分けていくかということについては，もしかするとほかの教科や総合等，道徳等との足並みをそろえるという点においては，少しイレギュラーになってしまうかもしれないのですが，もう一度お考えいただきたいということを繰り返し申し上げたいと思います。これが1点目です。

2点目です。これは資料4でございます。先ほども少し申し上げたことですが，これから新科目「公共」が高等学校で議論されていきますと，おそらく特別活動の特に（3）との関係が議論されてくるかと思うのですが，是非これは事務局の皆様方がお考えのことかと思うのですが，アカデミックな学習としての何を知っているかということを中心とした学習としての社会認識を深めるのが，おそらく「公共」の力点なのだろう。自分のキャリアをどう切り開いていったり，自分でどう社会に参画していったりということを，自分に引き付けて，クラスや学校の中の間関係と共に学んでいくことが，特別活動の領域なのだろう。ですから，「公共」が議論されていくことと，特別活動の価値が下がっていくことが同時進行に起きないということをここで確認させていただくとともに，特別活動の価値ということについては，再度強調しながら，この公共との関係性ということを踏まえてまいりたいなということをお個人的に思ったということです。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。

では、杉田委員、お願いします。

【杉田委員】

あるキャリア教育に熱心な学校が、子供をキッザニアに連れて行きまして、「働く喜びを知りました」と言ったのですが、普段の掃除がしっかり行えないというようなことが起こっています。何が分かっているかということも大事だけれども、それをどう使える資質・能力として身に付けているかが大変重要だと思います。

余談ですが、エジプトが今、特活に関心をもっていまして、我が国を訪れた際の学校訪問先をどうしたらいいかと内々に相談がありました。そのときに申し上げたのは、掃除を御覧になりたいということでしたが、掃除だけを見て意味があるのかと。日本の場合は掃除だけをさせているのではなく、話し合いなどの授業を通して「何のために」という価値を理解できるようにするとともに、子供たちが「そのためにどのように」などの目標を立てたり、方法を見定めたりして主体的に取り組めるようにしています。それらを一体として参観できるようにする必要があると申し上げました。そこは、まさに特活におけるキャリア教育の特徴です。

全ての教育活動を通して行うとされている〇〇教育は、道徳教育やキャリア教育など20も30もあると言われていています。それらの〇〇教育を、どの教科でもしつかりと行わなければならないと捉えたら、現実的に結局学校はやりきれず、実効性が乏しくなります。であるからこそ、核とする教科等を示す必要があります。そういう意味では、道徳教育は全ての教科等で行うが、その要は道徳の時間という位置付けは、極めて分かりやすく、道徳の時間としても道徳教育全体としてもメリットが大きい。つまり、キャリア教育は全ての教科等で行うが、その中核的な時間が特別活動だという位置付けは、特活にとっても、キャリア教育にとっても双方向の利益につながるのではないかと思います。

一方で、特別活動は、様々な〇〇教育からの期待も大きく、どれも中途半端になりやすいという課題もあります。それは核としての役割を見失うことにもなりかねない。かつてから、特別活動は、道徳教育、健康・安全教育・食育、環境教育、法教育や主権者教育、人権教育などなどをはじめ、生徒指導や学級経営などにおいても重要な役割が期待されてきました。しかし、充てられる授業時数が限られる中で、網羅的でどれも成果を上げきれないという側面がありました。今日的な教育課題は増える一方ですが、学習指導要領の変遷の中で、学活(2)や学校行事がどんどん膨らんでいるのは象徴的なことです。

その点で言えば、今回、総則において、しっかりとキャリア教育の重要性を示しつつ、

その中核的な時間として特別活動を位置付けるということが明確に分かるように示す必要があると思います。その上で、キャリア教育を進路指導にわい小化することなく、これまでそうしてきたように特活全体で受け止めるようにしたいと思います。

自己の成長に主体的に向き合うために様々な自己の取組を可視化して蓄積し、それを振り返りつつその先の生き方を決めていくようなキャリアパスポートのような発想は、とても大事なことです。それを小学校も学活(3)として行うことも理解できます。問題は、ここで取り上げる内容が学業的なこと、働くこと、進路などにわい小化されてしまわないかということです。学活(1)や各種の自治的な活動や自己指導能力を育てる生徒指導的な話し合い活動も、キャリア教育として重要な役割を果たしてきたことが見失われてしまわないようにするため、キャリアパスポートの内容はとても重要です。具体的には、学級運営に主体的に参画するような自治的な話し合いなどの活動にも、学活(2)で自己改善に取り組む話し合いにも活用できる資料にすることで、特活としても、キャリア教育としても双方にメリットになるのだと考えています。そして、そのことは、海外から注目されているが教科書のない特別活動というものを、より客観的に伝えるための資料としても大変重要な役割を果たすことになるのではないかと考えています。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。

さあ、時間もそろそろなので、須藤先生、どうぞ。

【須藤主査代理】

お願いいたします。杉田委員、藤田委員からまとめた部分が出ております。全くそのとおりだろうと思います。特に藤田委員から出された歴史的な経緯というものは十分に踏まえる必要がある。昭和26年に職業科というものが教育課程の中に位置付けられ、33年にはそれが技術家庭科に変わってしまったために、職業教育が廃止されて、そこで進路指導。進路指導というのは個別的な対応なのだけれども、ではどこでやろうかというときに特別活動という経緯があったわけです。しかし、特別活動の中では、進路指導については個別的な部分につき、保護者とか本人、又は教師との相談活動の中で賄うこととして、レポートにもありましたように、進路、学習としてそれを取り上げて、うまくコーディネートしながら扱ってきた。そういう中で、更にそれが今度はキャリア教育に変わろうとしているというわけです。何ゆえキャリア教育に変わらなければならないのか。いわゆる出口指導的な部分だけに限られてしまった進路指導はなかっただろうか。例えば、中学生の事

例として、精神的な発達課題の中で、家族からだんだん離れていく、そういう心理的なものを背景とした、ないしは自己喪失感、自分に自信がない。これは様々な白書で明らかになっていますよね。そういう中で、将来の進路を選択しなければならないということで、そういうことは事前にする必要があるだろうと。そういうもろもろのものがあって、いわゆるキャリア教育というもので再統合していくわけですから、キャリア教育の意義を特別活動の中でどう生かしていくかということ。そういう議論に変わってくるのだろうなと思っています。

そういう中で、例えば、資料4については、「その他の教科」と青い帯になっているこの部分が、かなり重要な部分があるだろうという気がいたします。教科、総合、そして道徳、そういう中であって特別活動の役割はということになるわけですね。それから、進路指導がキャリア教育になった背景のあと一つとして、進路指導というのは学習指導要領の文言として中学校、高校で位置付けられている。小学校にはないわけです。しかし、先ほど申し上げましたが、職業と学校教育との関わりをより明確にしていく、そういうものの方向性を発達の段階の中でしっかり押さえていく必要があるということから、キャリア教育が叫ばれるようになってきているという背景があるように私は思っているわけです。そうしたときには、自己認識であるとか、自信をもって活動できるようになるとか、そういう部分で改めて小学校ではキャリア教育の視点でどういう特別活動の活動内容が考えられるか。杉田委員もおっしゃったように、それこそ特別活動をより強化することにもつながっていくという捉え方をすべきなのかなと、話を伺っていて感じました。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。これで時間ですので終了したいと思います。お話を伺いながら、特別活動の教育力と言いますか、汎用力は強いなということをしみじみ感じました。だからといって、特別活動だけやって成果があるということではなくて、やはり丸々教育の視点、キャリア教育もそうですけれども、それから、他教科等との重なりというか、相乗効果で特別活動も更に特質が生かされるということだろうなと思いましたが。ですから、特別活動の意義とか価値をしっかりと押さえながらも、しかし、その相乗効果によってほかの教育活動も更に充実していく。そういう特質が特別活動にあるのだなと私も勉強させていただきました。藤田委員がおっしゃったキャリアパスポートについては、杉田委員もおっしゃったように、総合的に蓄積していくという意味では、ICTの活用で考えていてもいいのではないかと思います。それをペーパーベースなどでやったら大変なことにな

りますので、総合というのはどんなものを含むか考えなくてはいけませんけれども、ICTを活用して、これを蓄積していく。これは、教育改革の再生実行会議でも少し出たのですが、あまり議論は深まりませんでした。

【須藤主査代理】

この資料ですよ。

【貝ノ瀬主査】

そうです。もう一度こういう機会にそれを見直してもいいのではないかなと思います。

今日予定されていた議論は、これで終了いたします。最後に、次回の日程などについて、事務局からお願いいたします。

【美濃教育課程課課長補佐】

失礼します。今回は、3月23日を予定しております。詳細につきましては、改めて御連絡させていただきたいと存じます。

【貝ノ瀬主査】

ありがとうございました。では、今日の特別活動ワーキンググループを終了させていただきます。少しオーバーしました。御協力ありがとうございました。以上でございます。

【美濃教育課程課課長補佐】

すみません、それで、今日の議論の中で十分に尽くせなかった部分等につきましては、ペーパーによる御意見等も頂戴したいと考えておりますので、ファックス、メール、郵送等で構いませんので、お送りいただければと思います。以上でございます。

【貝ノ瀬主査】

お疲れさまでした。

— 了 —